

建設時評

見えることの意味

東北大学大学院 情報科学研究科
准教授 平野勝也

兼任している建築・社会環境工学科の建物に、筆者は研究室を構えていた。こともあろうに、土木・建築の居城が、東北大学工学部の建物で最も甚大な被害を受けた。資格を持つ建築の先生自らによる判定で、「危険建物」と認定され、立ち入り禁止となった。建築系の雑誌で、四隅の柱が破壊された姿が大々的に取り上げられ、今や有名建築の仲間入りである。幸い、けが人もでなかったのだが、お恥ずかしい限りである。かくして、本籍のある情報科学研究科棟に居候の身となった。

居候している部屋は、そもそも教員室ではないため、ドアがガラス張りで、廊下から室内が丸見えであった。これでは落ち着いて仕事が出来ないと思い、人の目線の高さにポスターを貼ってみたが、今度は部屋に来る人が、筆者が在室しているかどうかを確認するために、屈んで覗き込むようになった。あからさまに誰かが自分を覗き込んでいる姿を、中から見る身としては、余計に落ち着かない。業を煮やして、学生の協力を得て、とりあえず

ガラス部分にトレーシングペーパーを貼り付け、急場を凌ぎ現在に至っている。

これは、見えること、もしくは、見える可能性だけでも、空間の意味付けが、随分と変わることの一端を示している。人が環境を認識する際、80%を視覚に頼っていると言われていた。それほど、視覚は重要なのである。そのため、「見る」という言葉は、極めて多様な意味を持って用いられている。友人に「荷物見ておいて」と言われて、その荷物を凝視することと受け取る人はまず居ないだろう。逆に、誰かを「見守っている」時は、物理的には見ているだけ、もしくは、それは比喩に過ぎず、見てさえいないかも知れない。「百聞は一見にしかず」という諺は、見ることが如何に多くの、そして信頼できる情報を提供してくれるかを端的に表している。

※ ※ ※

今、津波被災地では、この「見えることの意味」が改めて問い直されている。復興事業の中で、海岸には防潮堤が、河川には堤防や防潮水門が、もう一度造られていくだろう。街や集落から海や川が「見える可能性」は、防潮堤や堤防の高さに大きく左右される。高所移転、高台移転についても、その高所や高台から、海が見えるかどうかは、その敷地選定にかかっている。

景観の専門家である筆者がこうしたことを述べると、「美しい海や川が見えることで、観光にとってプラスになる」といった、皮相的な話と思われるかも知れない。しかし、そうではない。見えることの意味は、もっと人間の暮らしの中で、本質的な部分を支配しているのである。丁度、筆者がトレーシングペーパーで見えなくすることで、自室を廊下

から切り離し、落ち着いた執務環境を造ろうとしたように。

そもそも、海と深く結びついて暮らして来た被災地の人々は、日々、日常生活の中で海を見てきたのである。海と切り離された生活など、考えられないであろう。時々刻々と移り変わる海の様相から、漁の安全や好不調を見てとり、日々の暮らしを送ってきたのだ。被災地の人々の暮らしは、海とともにあり、それは、海が見えることで、はじめて実感を持って強く結びつくことができたのである。観光など、どうでも良いのである。海の様子がおかしければ、心張り詰め、穏やかになれば安堵する。見えるからこそ、海とともに暮らせるのである。見えなければ、心張り詰めることも、安堵することもなく、ただ解らないという、漠然とした不安とともに、過ごすことになるだけである。

減災の観点からも、見えることの重要性が指摘されている。津波や高潮、海が見えることで、避難すべき状態かどうか、実感を持って伝わる。万が一、今回のように、停電によって、防災無線やテレビ・ラジオが機能しなくなっても、見れば解るからである。今までの被災履歴とともに、海が見える地域は、引き波を見て、比較的避難が行われ、海が見えず、今まで被災していなかった地域は、逃げなかった人が多かったと聞く。

※ ※ ※

津波や高潮からの安全性を高めるのは、防潮堤や堤防の高さである。基本的に高さだけが一義的な安全性を支配する。つまり、防潮堤や堤防を、高くすればするほど、安全になる一方、その安心感が、避難行動を抑制してしまう可能性もある。そして、海が見える可

能性も日常の海との繋がりも希薄になる。一方、低くすればするほど、安全性は下がるが、海が見える可能性も高まり、日常の繋がりも強くなるのだ。見事な二律背反である。しかも、今回のような巨大津波が来る頻度と、その陰で延々と営まれる日常生活。そのどちらを重んじるべきか、そんな長い時間軸を考えれば考えるほど、この二律背反は深刻である。

この拙稿が世に出る頃には、防潮堤や堤防の高さには決着が付いているだろう。事業費の問題、縦割りの問題、日常の海や川との繋がり的问题、全てについて熟考を重ねた結果として、適切な高さが決まっていることを祈念してやまない。そして、この高さが決まれば、復興計画の策定は大きく前進するはずである。なぜなら、言うまでもなく、その高さが復興計画の根幹をなしているからである。

そして、決まった高さに基づき、この見事に二律背反になっている安全性と海との繋がりを、より両立させるような防潮堤や堤防のあり方を、今こそ、土木技術者の叡智を結集し、示していかなければならない。土木技術者の責務である。

※ ※ ※

石巻の日和山からは、被災地、旧北上川、そして太平洋が一望できる。日和山とはその名の通り、帆船で航行するため、漁に出るため、沖合の風や天候（日和）を見るための山である。古い港町には必ずといっていいほどあり、海沿いに住む日本人が、海との繋がりを保ってきた象徴と言える山である。

そんな日和山に登り太平洋を遠望する。自然に手を合わせたい思いに駆られる。その祈りの向こうで、鎮魂の海が、津波被災地の未来を語りかけてくれる気がする。